様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ５ 月　 ３ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2024
課題番号：２０Ｋ１３２９０

研究課題名（和文）海洋生物の捕獲と養殖をめぐる文化人類学的研究：中国・台湾・フィリピンの事例から

研究課題名（英文）An Anthropological Study of Marine Resource Harvesting and Aquaculture: Comparative Cases from China, Taiwan, and the Philippines

研究代表者
藤川　美代子（FUJIKAWA, Miyoko）

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：１０７４９５５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：海洋生物のなかでも各種の海藻に注目し、特に日本と台湾の海藻利用を支える養殖・採集・流通・副次加工・消費の様相について明らかにすることを試みた。具体的には、１）日本の寒天原藻（寒天の原料となるテングサ科などの海藻）をめぐる採集・乾燥・入札の仕組みと歴史、２）日本における寒天原藻枯渇の危機と海外産海藻の輸入、３）テングサ供給地として発見された台湾における寒天製造の模索、４）台湾におけるテングサ枯渇の危機とオゴノリ養殖技術の開発およびオゴノリ由来の寒天製造への転換、５）台湾における環境問題と寒天製造挫折の危機、６）北海道産天然コンブと中国産養殖コンブとの間で揺れる台湾といったことについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では必然的に、①海の動植物に対するドメスティケーション（栽培化・養殖化）、②海という空間の制御（自然災害予防）、③海に生きる人々の統治（国境管理・国家防衛・海洋保護）にかかわる管理システムなどに注目することになった。これらは本来ならば水産学・経済学・政治学・防災学・土木学・軍事学・環境学といった各分野で細かく分断される形で分析がなされるはずのものであるが、本研究はそれらを「海を飼い馴らす技術」として議論の俎上に載せる点で学術的に意義をもつ。また、海藻資源の枯渇化は現在とりわけ重要な環境問題であり、先人たちがいかにこの危機を乗り越えようと試みたかに注目する本研究は社会的にも深い意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This study focused on various types of seaweed among marine organisms, with particular attention to the practices supporting the use of seaweed in Japan and Taiwan, specifically aquaculture, collection, distribution, secondary processing, and consumption. The research aimed to clarify the following points:
1) the system and history of collection, drying, and auctioning of agarophytes (seaweeds used as raw materials for agar production) in Japan;2) the crisis of agarophyte depletion in Japan and the resulting importation of seaweed from overseas;3) the exploration of agar production in Taiwan, which had been newly identified as a supply source of Gelidium;4) the crisis of Gelidiaceae depletion in Taiwan and the shift to Gracilaria vermiculophylla-based agar production;5) environmental issues in Taiwan and the ensuing risk of failure in agar manufacturing; and 6) Taiwan's current position caught between domestically sourced wild kombu from Hokkaido and imported farmed kombu from China.

研究分野：文化人類学

キーワード：海藻　寒天　資源の枯渇　採捕と養殖　日本　台湾　文化人類学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## 1. 研究開始当初の背景

### 1)定住とドメスティケーション

ドメスティケーション、すなわち飼い馴らしの技術の歴史は、人類の定住とともに始まった。人類は約 1 万年前、自らの身体と住まいを動かすことで野生動植物の生息空間や水のありかを探索・追跡し、目当てのものを採集・狩猟・漁撈する遊動生活の挫折として、定住生活への移行を経験した。結果的に人類は「不快なものに近寄らず、リスクがあれば避ける」との遊動的身構えを放棄して、一定範囲内の土地に留まったまま充足的な食糧を獲得し、不快や危険の因子をその内側で解決する必要に迫られることになった。そこで登場したのが、①農耕・牧畜という食糧生産技術、②固定的な人間関係内部の不和を最小限にする仕掛けとしての調停・統治、③災いの原因を超自然的存在に求めて庇護を請うといった文化の装置である（西田 1986『定住革命』）。

人類史における分業・階級・国家・文化の発生契機としての「定住革命」（西田 1986）とは、人類と自然とのつき合い方にかかる重大な変革にほかならない。それは人間のほうが自然に適応してゆくことを基本とする態度から、野生動植物の改変＝ドメスティケーション（栽培化・家畜化）によって人間が自然に積極的に働きかけ、管理・制御に主体的に関与する態度への転換を示すためである。

### 2)定住化という名のドメスティケーション

重要なのは、文明の発展とともに管理・制御の欲求が人間自身にも向けられてきた点だろう。とりわけ近代国民国家の登場は、「定住民優越主義」（スコット 2013『ゾミア』）の思考をいっそう加速化・厳密化した。明確な境界により画定された領域と均質な国民を想定する国家は、地番により特定可能な居所に基づき国籍・戸籍・住民票などの ID を発行し、それらが教育・医療・社会保障などを担保する仕組みを整えていった。その上で、国家は文明化・保護という名の餌をちらつかせ、なおも遊動的な生活を維持していた人々に接近し、彼らを一定の土地に囲い込んで定住を強いることになった。つまり、ここにきて統治法の一種としての定住化は、遊動民のドメスティケーションとも呼び得る性格を帯びるようになったのだ。

本研究が対象とする第一の軸、A）中国の船上生活者もまた、世界の遊動民（＝山地の狩猟採集民、草原の遊牧民、都市のジプシーなど）とともに、1950 年代に入って陸上の土地・家屋の供給を伴う定住化を経験している（cf.長沼 2010『広東の水上居民』;胡 2017『江南の水上居民』）。

### 3)予測･管理･制御･克服困難な自然状態としての水上空間

注目すべきは、船上生活者の定住化とは須らく、水上からの引き離しと陸上の居所への固定を意味した点である。なぜなら、そこには「安全・豊かさ・文明から隔絶した水上／すべてを叶える陸上」との思考が見え隠れするからである。おそらくここには、「ひとたび荒波が来れば簡単に人の命を奪い、潮汐の如何によってはそこに生きる者の経済的安定性を阻む、およそ人間には予測・管理・制御・克服困難な、むき出しの自然としての水上」との含意がある。肝要なのは、その背後にある①陸上は相対的に水上よりも人智が及びやすく、不確実性の少ない空間である、そして②人間が存する空間は、等しく人智によって予測・制御・征服されねばならぬという二つの認識である。いずれも、人間は確率・統計といった数値化の手法を駆使して、自然・社会環境に潜む不確実性を掌握することが可能であり（「確率革命」（クリューガー1991『確率革命』））、掌握した以上、科学知を用いながら環境を管理･制御することで将来迫り来るであろうリスクの規模をできるだけ抑えるよう行動すべきとの、現代特有の強迫観念に貫かれた思考といえる。船上生活者を 相対的に リスクの低い 陸上空間へと引き上げる定住化は、国家のリスク管理の線上になされたものと理解できよう。

### 4)管理･制御の対象としての海へ

とはいえ、海ももはや不確実性に満ちたむき出しの自然などではあり得ない。情報科学技術の目覚ましい発達は、以下に見るように、海さえも予測・管理・制御可能な空間に仕立て上げたからだ。

①海の動植物に対するドメスティケーション（栽培化・養殖化）：多くの国家は、水産資源の安定的かつ充足な流通を叶えるという経済上の要請と、海洋資源枯渇を防ぎ、持続可能な漁業を模索せねばならぬという人類に課せられた高邁な理念との間でジレンマを抱えている。両立の願いは世界中で「捕るから育てるへ」の転換を大いに促し、遺伝子組換えを含む高度な品種改良技術を駆使した水産資源（魚類・甲殻類・貝類・海藻類など）の養殖化・栽培化が急ピッチで進められている。

②海という空間の制御（自然災害予防）：人間の居住空間たる陸上に甚大な被害を引き起こす津波・高潮・高波・竜巻のたび重なる発生は、海の治水技術に進歩をもたらした。消波ブロック・防潮堤・堰の建設は、（効果の程度はともかくとして）災害の発生を最小限に抑える役割を担っている。また、海は風の方向と強さ・気圧・潮位・潮汐の干満・月齢など数値化可能な諸データで常時観察・記録され、気象学という名の科学知やそれをもとに発令される各種の避難警報によって人々をリスク回避へと誘う仕組みが整えられている。

③海に生きる人々の統治（国家防衛・国境管理・海洋保護）：海は、国防強化や犯罪者・不法出入国企図者の侵入逃走や密輸・密漁といった各種領海侵犯防止の舞台でもある。海上・海中に

は各種軍艦が配備され、国境警備隊や水上警察隊の船が巡回しており、海を航行する者にも、公的機関により発行される各種許可証・証書の携帯と出入港時の登録が義務づけられている。さらに、海洋保護のために各国は従来の漁業権に加え、休漁期間や絶滅危惧種の保護条例を定めたり、漁船の廃棄を奨励したりして、野生種の乱獲防止に努めている。このほか、海の環境汚染の防止・解決にも多くの策と資金が投じられている。

こうして見ると、①水産資源の供給元、②自然災害の発生源、③国防・国境管理上の要所としての海に対する管理・制御の試みは、どれも「国家には国民を庇護する責任がある」との理念に貫かれた、きわめて人間中心主義的なものであることが諒解されよう。さらにいえば、「国民の庇護」の大義名分とは、国家や国民の不利益となり得るリスクの発生を未然に防ぐための管理・制御システムが、個々人の自由や利益に優先するとの事態に確固とした正当性を与えるものである。

## 2. 研究の目的

人は海という空間をいかに飼い馴らしてきたのだろうか。本研究は、①海の動植物に対するドメスティケーション（栽培化・養殖化）、②海という空間の制御（自然災害予防）、③海に生きる人々の統治（国境管理・国家防衛・海洋保護）にかかわる管理システムの総体を「海を飼い馴らす技術」と名づけ、それらが自然状態としての海に含有される不確実性の克服手段として精緻化されるプロセスを追うことで、海に生きる人々が経験した近代化の一端を捉えることを目指す。具体的には、魚類・貝類・海藻類の捕獲／養殖において異なる依存の程度を見せる A）中国の船上生活者、B）台湾の海女、C）フィリピンの海藻養殖者の三者に注目し、まったく別の政治制度と、経済的利益の追究・持続可能な資源利用・国家による国民の庇護といった方向性の異なる理念が錯綜するなかで、彼らが海を管理する主体／国家により管理される客体の間を揺れ動く姿を考察する。

## 3. 研究の方法

先の問いに重層的かつ深淵な答えを与えるために、以下の研究方法を採る。すなわち、1）インタビューと参与観察を含む文化人類学的な現地調査、2)「海を飼い馴らす技術」にかかわる各国・地域の法律・条例集、啓蒙用冊子といったテキストの収集・分析を含む歴史学的な史料調査を並行しておこなう手法である。また、互いに海に密着した形で生活を営む人々でありながら、おかれた政治・経済・社会・自然環境も、魚類・貝類・海藻類の捕獲／養殖における依存の程度も異なる A）～C）の三者を考察の対象とする。これら三者はまったく別の政治制度のもと、経済的利益の追究・持続可能な資源利用・国家による国民の庇護といった方向性の異なる理念が錯綜するなかに生きており、彼らが複数の制度／複数の理念の間で、さらに海を管理する主体／国家により管理される客体の間で揺れ動く姿をていねいに拾い上げながら分析する。

## 4. 研究成果

2000 年春から始まった COVID-19 の世界的蔓延とそれに伴う国内外における移動の制限という状況を受け、インタビューと参与観察を含む文化人類学的な現地調査を基礎とする本研究は内容の縮小を余儀なくされた。

そこで、当初定めていた調査対象と研究方法を次のように設定しなおすこととした。

A）中国福建南部の船上生活者「連家船漁民」：現地調査をとりやめ、本課題採択前の 2019 年度までに実施した現地調査で得られたデータの整理、関連する分野の文献の渉猟・精読、研究成果の発表に努める。

B）台湾東北部の「海女」：2020 年度～2022 年度は 2019 年度までに実施した現地調査で得られたデータの整理、関連する分野の文献の渉猟・精読に努め、2023 年より現地調査を開始する。

C）フィリピン・ミンダナオ地方の海藻養殖者：現地調査を断念する。

さらに、上述のような研究内容の縮小に対応するために、以下のとおり、採択当初は予定していなかった地域・テーマでの研究を追加し、インタビュー・参与観察を含む現地調査および資料調査を平行して進めることとした。

D）台湾の海藻利用を支える養殖・採集・数次加工・流通・消費に関わる人々

E）日本の海藻利用を支える養殖・採集・数次加工・流通・消費に関わる人々

主な成果は以下のとおりである（発表時に当該課題によるものと言及していないものも含む）。

**1）口頭発表「「よい石花菜」をめぐる解釈の多様性――台湾東北角における「海女の民俗」の共同研究からみえてきたこと」**海女学講座Ⅲシンポジウム「各地の海女と海藻漁」（2020 年 12 月、於：鳥羽市立海の博物館映像ホール、主催：三重大学海女研究センター）

台湾と日本の研究者が共同で進めてきた台湾東北部における「海女」の生業に関する研究の概要を紹介した。現地では、①素潜りで石花菜（テングサ）を採集し、石花菜の乾燥・トコロテンの加工・小売りまでを担う地元の男性・女性、②地元以外の地域からやって来て、タンクを背負い潜水して石花菜を採集するダイビング・インストラクター、③②から採れたての石花菜を購入し、石花菜の乾燥と台湾域内の乾物問屋やメーカーへの卸売を担う産地問屋の間で、「よい石花菜」とはどのようなものかをめぐる語りが錯綜するが、そのことは、台湾東北部独特の石花菜の価格決定システムと密接に関わることを考察した。

2)論文「よい『石花菜』とは何か―台湾東北角における Gelidiaceae の採集・加工・売買をめぐる民族誌的研究」『現代民俗学考一郷土研究から世界常民学へ』(2021 年 3 月、春風社)

「よい石花菜(紅藻類テングサ科の総称)」をめぐる多様な解釈に注目し、台湾東北角における石花菜の採集・加工・売買の様態の特徴を論じた。注目したのは、①ダイビングのインストラクターや原住民族と雇用関係を結び大規模な石花菜採集を展開し、台湾内外で販路を開拓する卸売業者(男性)、②自身も素潜りで石花菜を採集し、露店で石花菜の加工品を小売販売する店主(女性二人、男性一人)の語りと、①と②の間でくり広げられる複雑な石花菜の売買である。さらに、日本の伊豆半島におけるテングサのランク付けや競売の仕組みと比較することで、台湾東北角の石花菜をめぐる価値決定システムの特徴を導いた。

3)論文「台湾の「海女」とは誰なのか」『国際常民文化研究叢書第 15 巻―台湾の「海女(ハイルー)」に関する民族誌的研究―東アジア・環太平洋地域の海女研究構築を目指して』(2022 年 3 月、神奈川大学国際常民文化研究機構)

台湾本島北海岸から東北部沿岸までの地域には、女性が浅瀬を歩いたり素潜りをしたりして海藻・貝類などを採捕する民俗が広く存在する。浅瀬を歩く女性が「私には潜る技術がないし、専業で海のものを採るのではないから、『海女(台湾語:ハイルー)』ではない。本当の海女は東北部にいる」と語るのに対し、東北部で潜水漁をする女性は「それほど潜るのが上手ではないから『海女』ではない。あくまでも『家庭の主婦』として海のものを採っているに過ぎない」と語り、一見すれば台湾には「海女」という存在はいないかのように思われる。しかし、メディアや博物館の展示、観光 PR ではこの地域で海藻・貝類を採捕する女性を一括して「海女」と呼んでおり、自身は「海女ではない」と話す当の女性たちが海藻の小売りの場面では「海女」であることをアピールするという錯綜した状況があることを明らかにした。

また、この背景を理解するためには、日本統治期の台湾で開催された始政 40 年記念台湾博覧会において、日本内地の鳥羽から招かれた海女が大水槽の中で真珠採りをして見せる海女館が開設され、それに関連して鳥羽の海女の生活などが現地の新聞で連日取り上げられたという状況なども考える必要があることを示した。さらに、研究を進める上では、日本や韓国で展開されてきた海女研究に基づき「海女とは誰か」を見極めるような姿勢からは距離をとり、台湾の北海岸・東北部で海藻や貝類を採集する人々の生活や生業をつぶさに観察する必要があることを示唆した。

4)論文「海に生きる女性―船上生活者と海女―」『日本民俗学』第 311 号(2022 年 8 月、日本民俗学会)

「世界常民学」はいかにして可能なのか。本稿が目指すのは、「(陸ではなく)海に生きる」「(男性ではなく)女性」という、従来の日本民俗学においては二重の意味で周縁性を付与されてきたかに見える人々の営みに焦点を当てることで、「常民の学」を世界へと接続するための糸口を見つけることである。

本稿でまず注目したのは、柳田国男や折口信夫とは別の角度から常民の生活を捉えようとした渋沢敬三が設立したアチック・ミューゼアム(一九二五年から本格始動。一九四二年に日本常民文化研究所と改称)と渋沢水産史研究室(一九三五年から本格始動)に集った同人たちと、瀬川清子ら初期の民俗学者が日本各地の「家船漁民」や「海女」に向けたまなざしである。そこからは、これらの研究が一村内・一国内・単一ジェンダー内にとどまらず、多地域間の多様な人々の関係性理解へと開かれる可能性を秘めていたことがわかった。一方、筆者は台湾東北部の海に生きてきた「海女」(ハイルー)の生業・生活とその主要採集物であるテングサの流通について考察しようとしてきた。筆者はそのなかで、テングサが産地の集落を出た途端に、その流通経路を見失ってしまうという経験をしている。これにはおそらく、一九世紀後半以降、原料としてのテングサおよび加工品としての寒天に画期的な利用価値が見出され、それらの流通過程が世界規模で複雑化してきたことが影響している。本稿では、テングサを例に、モノや人を介して実際につながる世界の「常民」の日常と、越境的に世界中へと広がるそれらのネットワークの重なりを丹念に紐解き、描くという視点や手法に「世界常民学」の可能性を見出すことができるだろう。

5)口頭発表「台湾の海女(ハイルー)とテングサの採集・加工・流通」南山大学人類学博物館講座「南山大学の研究者」(2022 年 6 月、於:南山大学、南山大学人類学博物館主催)

前半では、台湾東北部で「海女(ハイルー)」と名指される女性たちのうち、素潜りで海藻類や貝類を採集してきた新北市貢寮区澳底の数人に注目し、主にテングサの採集・晒し・ゴミ除去・小売りの過程を詳述するとともに、小売りの場における互いの関係性について紹介した。そこでは、通りすがりの一見の客に対して自身の販売するテングサの質の高さを説明する方法が各人で異なっており、それが「同種類=同価格、品質による価格の差なし」という台湾東北部の産地における小売り・卸売りの暗黙のルールに従わねばならないという制約があるなかで、自身の手

元にあるテングサをいかに効率よく販売するかという個々人の戦略として機能していることを示した。

後半では、台湾東北部の乾燥テングサのうち大口の卸売に携わる産地問屋は、実は自身の卸した相手の乾物問屋などの次にテングサが誰の手に渡るかをほとんど把握しておらず、それゆえに研究者もまたテングサの行方と最終的な消費のされ方を知ることがとても困難であることに言及した。また、日本統治期の台湾はテングサの供給地として発見され、その大多数が日本内地に移出され寒天製造に供されたにもかかわらず、近年では日本に台湾産のテングサが輸出されている形跡がないことに触れながら、日本の寒天は国内のテングサ、その他の寒天原藻の資源枯渇という危機に直面し、海外産の原藻を輸入し、国産の原藻とブレンドすることで対処しようとしてきたことを示した。さらに、近年では世界中で寒天原藻の資源の減少が深刻となっており、医療実験用の寒天培地に使用する粉寒天の供給に課題が生じる一方で、寒天がゼラチンに代わる食品としてビーガンにも受け入れられ需要が伸びるなどしており、資源をめぐり国家間・異業種間での競合が今後ますます激しくなるだろうと述べた。

6)口頭発表「台湾東北角海女的生活與海藻文化」藻之道:台湾海女與海藻文化座談(2024年3月、於：台湾国立海洋科技博物館、台湾国立海洋科技博物館・海霞您的家主催)

台湾東北部で「海女（ハイルー)」と呼ばれる女性の生活と生業を明らかにするなかで、タンシサイ・ヒトエグサ・カイノリ・ウシケノリ・ムカデノリの一種・トゲキリンサイ・マクサ・オニクサ・カタオバクサといった各種の海藻をどのような道具でどのような海域で採集し、いかなる加工を施すのかを詳細に示した。また、日本の寒天製造がいかに海外産の原藻に支えられているのかを理解するために、長野県茅野市を中心とした地域を産地とする角寒天と、岐阜県恵那市山岡町を産地とする細寒天の製造に用いられる原藻の産出国を細かく紹介した。さらに、同じ工場内でも、寒天原藻の仕入れに関わる責任者は産地ごとの海藻の特徴を把握しており、特に日本国内の各産地の状況についてよく理解しているように見えるのに対して、それ以外の作業を担当する人の多くは寒天の原料となる海藻がどのような環境で採集されているのか、どこからやって来るのかをほとんど把握していないこと、反対にテングサの産地の側でも自分たちの採集した海藻が和菓子の羊羹などに使われていることは知っていても、海藻が誰の手を経てどこへ行き、どのような加工の過程を経て和菓子メーカーにたどりつくのかについては知らないというように、海藻の採集・流通・加工に関わる数々のアクター間では海藻の知識をめぐって大きな断絶が見られることを明らかにした。

7)口頭発表「台湾における「洋菜(寒天)」製造と海藻の採集／養殖・加工の歴史」("History of production and seaweed collection/ farming/ processing in Tiwan")、 2024 International Conference on Oceanic Culture & The 11th East Asian Island and Ocean Forum (EAIOF)（2024年11月、於：國立台灣海洋大學)

新聞資料などの分析を通して、日本統治期に日本内地の寒天工場へ移出するためのテングサの供給地でしかなかった台湾において、日本内地出身者が気温・湿度の高い環境に適した紙寒天や粉寒天の製造技術を開発したことを明らかにした。また、1960年代にはテングサ資源の不足と価格高騰という危機と、日本発のオゴノリのアルカリ処理技術の台湾への導入、台湾におけるオゴノリ養殖技術の開発・発展という偶然が重なったことで、オゴノリ由来の「洋菜」（寒天）の製造が安定的に製造可能となったことを示した。さらに、洋菜メーカー経営者からの聞き取りと国史台湾文献館や国家档案館などに残るきわめて断片的な記録の分析をとおして、1990年代後半から2000年代初頭にかけて工場排水による水質汚濁が問題となったこと、タイワントコブシの養殖に大量のオゴノリが用いられるようになったこと、台湾域内の人件費が高騰したことなどの影響から、台湾のほとんどの洋菜メーカーが工場を海外移転したことなどを明らかにして、台湾における寒天製造の歴史を不完全ながら再構成することに努めた。

以上の研究成果と、成果発表にはまだつながってはいないものの現地調査および文献資料調査をとおして分析を進めつつある事柄とをとおして、本課題では、次のような 6 つの点について考察することができた。すなわち、1）日本の寒天原藻（寒天の原料となるテングサ科などの海藻）をめぐる採集・乾燥・入札の仕組みと歴史、2）日本における寒天原藻枯渇の危機と海外産海藻の輸入、3）テングサ供給地として発見された台湾における寒天製造の模索、4）台湾におけるテングサ枯渇の危機とオゴノリ養殖技術の開発およびオゴノリ由来の寒天製造への転換、5）台湾における環境問題と寒天製造挫折の危機、6）北海道産天然コンブと中国産養殖コンブとの間で揺れる台湾といったことである。これらの点についてはさらに調査・分析を進める必要があり、今後も研究を継続することとする。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤川美代子 | ４．巻<br>15 |
| ２．論文標題<br>「王昊凡、『グローバル化する寿司の社会学――何が多様な食文化を生み出すのか』」 | ５．発行年<br>2024年 |
| ３．雑誌名<br>『年報人類学研究』 | ６．最初と最後の頁<br>未定 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤川美代子 | ４．巻<br>311 |
| ２．論文標題<br>「海に生きる女性 ―船上生活者と海女―」 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>『日本民俗学』 | ６．最初と最後の頁<br>90-111 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤川美代子 | ４．巻<br>15 |
| ２．論文標題<br>「台湾の「海女」とは誰なのか」 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>『国際常民文化研究叢書第』 | ６．最初と最後の頁<br>35-63 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤川美代子 | ４．巻<br>15 |
| ２．論文標題<br>「「よい石花菜」とは何か――台湾東北角におけるGelidiaceaeの採集・加工・売買をめぐる民族誌的研究」 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>『国際常民文化研究叢書第』 | ６．最初と最後の頁<br>189-215 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>藤川美代子 | ４．巻<br>- |
| ２．論文標題<br>「「よい石花菜」とは何か ―台湾東北角におけるGelidiaceae の採集・加工・売買をめぐる民族誌的研究」 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>『現代民俗学考ー郷土研究から世界常民学へ』（書籍） | ６．最初と最後の頁<br>177-200 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>― |

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤川美代子 |
| ２．発表標題<br>「台湾の海女（ハイルー）とテングサの採集・加工・流通」 |
| ３．学会等名<br>南山大学人類学博物館講座（招待講演） |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤川美代子 |
| ２．発表標題<br>「海に生きる女性―船上生活者と海女―」 |
| ３．学会等名<br>日本民俗学会第73回年会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤川美代子 |
| ２．発表標題<br>「「よい石花菜」をめぐる解釈の多様性――台湾東北角における「海女の民俗」の共同研究からみえてきたこと」 |
| ３．学会等名<br>海女学講座Ⅲシンポジウム「各地の海女と海藻漁」 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>藤川美代子 |
| ２．発表標題<br>「台湾東北角海女的生活與海藻文化」 |
| ３．学会等名<br>台湾国立海洋科技博物館・海霞您的家主催講演会「藻之道：台湾海女與海藻文化座談」（招待講演）（国際学会） |
| ４．発表年<br>2024年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|